明るく楽しく学習する場を支え、活動を伝える試み

～児童・保護者・教職員に向けての広報資料作成を通して～

邑楽郡板倉町立西小学校
阿　部　　主

はじめに

現在のように、学校教育（現場）に対する関心・注文が高まっている時代がこれまであったであろうか。

学校週五日制の完全実施による授業時間の減少に端を発する、「学力低下問題」。一度取得すれば終身有効であった教員免許を、有効年数を区切り、研修を受けることで継続する「更新制度」への移行。この背景には、「教員の資質・指導力の変化と時代の要請」という問題が見てとれる。また、自殺者まで出してしまった「いじめ問題の見えない出口」の模索など、まさに課題山積の様相である。

このような中で、私は学校管理者として５年目を迎え、学校本来の姿である「明るく楽しい教育の場」をどのようにして児童（保護者）・教職員に提供し、教育の最終目的である「生きる力」を子どもたちに確実に身に付けさせるかという課題の達成を迫られている。確かに難しい問題ではあるが、教育という仕事に置く身にとっては、目を輝かせて登校してくる多くの子どもたちを、「何とかしてやりたい」という強い使命感に駆り立てられるのは事実である。

では、「その手だては」と問われると、私を含め多くの管理者が「即答」出来ないのが実情であろう。多くの管理者が（自分なりに）有効と思われる方策を考え、実践しているわけだが、今回、私なりにこれまで取り組んできた「児童・保護者・教職員」に向けての『情報発信』、「広報資料作成」を学校運営の観点から述べてみたい。

１．自然科学への意欲を高めたい　「科学の窓」を通して科学へ目を開かせる

「子どもたちの理科（科学）離れが進んでいる」という指摘が行われてから、かなりの時を経ているが、一向に改善の兆しは見られない。「『理科』は面倒だ」という固定観念が大きく影響しているためと考えられる。このような考え方が蔓延すると、理科に限らず手のこんだものすべてが敬遠されかねない。

時間をかけ、自然の摂理を説明し、「考えることの素晴らしさ」、「自分で実際に試してみる・体験してみることの面白さ」、「理屈ではなく自然の営みへの感動・驚き」などを子どもたちに話して聞かせたい、この思いは理科教員として歩みだした３０年以上前からずっと持ち続けていた。

４年前の平成１４年６月、部分日食が起こった。管理職となり初めて赴任した学校での２回目となる６月の朝会で、「日食」の話題を取り上げた。お盆と画用紙を使って懸命に行ったつもりだったが、時間の制約・用語の難解さは致し方なかった。その時の説明不足を補うために「科学の窓」という印刷物を作り、話し足りなかったことをまとめて児童に配布した。（**資料１**：「科学の窓」第１号　平成１４年６月６日発行）

２号以降では、子どもたちの学校での活動状況を通して、私の科学や自然に対する考え方を伝えるよう編集を工夫した。号を重ねる中で、「文字の量を減らして、図や写真を入れれば、低学年の子どもでも飽きずに見られるだろう」との意見もいただいた。その後は、ほとんどの漢字にルビを振り、「知識のみの伝達」に陥らぬよう配慮を続けた。

平成１４年度は６７号、１５年度は１００号（通算１６７号）まで作成して現在校に異動となった。平成１６年度に新たにスタートして、平成１８年１１月末で通算１８２号に達した。

５年目に入った現在でも発行の目的は平成１４年の出発時と変わらず、「学校での学習の楽しさ、友との語らい・活動を通しての発見、身に付けたことの素晴らしさ」などを全校児童・保護者・地域へ伝えることである。また、発行のテーマを分類すると、

① 児童との関わりの中で見つけだしたテーマの科学的な解説と学習への応用
② 季節毎のトピックスの解説
③ 天文現象や自然界での出来事の解説を通して観察活動の支援
④ 社会で起こっている科学的発見、発明、事件などの解説と学習の関連
⑤ 新聞紙上で取り上げられた科学的事象の日常生活との関連性を平易に解説
⑥ その他いずれにも属さないこと

となる。なるべく偏りがないように配慮したつもりだが、季節感の関係で前後性が整わなかったものも出てきてしまった。

新聞を読むことは、常に社会の動きに聞き耳を立て、さまざまな情報を得る近道である。科学の窓では、他のテーマが不足した時に有効に活用している。新聞や各種情報関係の資料を読むことは、常にテーマを探し、自分なりに複数の情報を汲み上げて、「科学の窓」というフィールドで再構築し、子どもたちに何が伝えられるか、という私に課せられた学習の連続である。

わずか 1500 文字（最大で。実際には図や写真が入るので、平均 1200 文字以下がほとんど：**資料２**参照、平成１８年度発行　縮小印刷）の中にテーマの解りやすい解説と、そこから生まれると予測される発展的学習の糸口を仕組んでいる。

手元を離れて一人歩きしている文を読み返すと、発行の目的である「自然に対する興味」を喚起出来たか不安である。事実、一部の保護者からは「発行の意図が不明確」との指摘を受けたこともある。一方、子どもたちから「科学」に関するいろいろな相談、あるいは「こんなことを取り上げて教えて」という声を耳にするようになってきた。このことは、前任校でも２年目には気づいたことで、少しずつではあるが、「科学への興味が芽生えてきている」と感じている。

２．子どもたちへの思い・願いを伝える　　情報提供・啓発が「伊奈良（いなら）の子」の役割

本校では、「学校だより」の発行は管理職である校長の仕事と、かなり以前から決まっており、平成１６年４月に異動してきた時から発行を続けている。

学校だよりを、ただ「学校だより」とするのでは「芸がない」と考え、学校のある西地区が今から５０年ほど前に合併になる前に呼ばれていた古い地名、「伊奈良」という名称を付けて「伊奈良の子」として発行を開始した。（**資料３**：「伊奈良の子」第１号平成１６年４月３０日発行）「伊奈良」とは、万葉集の東歌にも登場する由緒ある地名である。学校だよりは平成１８年１１月末で、通算１７８号まで発行している。

学校だよりを作り始めて、一体どんなことを保護者や家庭・地域に伝えたらよいかを何度も考えた。最初は「学校での出来事」、「学校長としての考え方」を伝えようとしたが、少しずつ内容が変化していった。このことは、保護者への学校教育に関わるアンケート調査の際の自由記述に、「学校だよりが何を伝えようとしているかわからない」という意見からもわかる。結果として、社会全体で取りざたされている「教育論」や、講演会に参加した際の内容なども不定期であるが、保護者に伝えた。

結局、私が一番に考えたことは、保護者への「情報提供」と「啓発」に他ならなかった。端的に言うなら、学校が解決しなければならない課題への対応を伝えることだった。

平成１７年度のアンケートの中に「新聞の切り抜きばかりではないか」「校長の考えをもっと聞きたい」というものがあった。私としては「自分個人の意見をストレートに伝えるばかりでなく、社会の状況を保護者に分かっていただいた上で、校長としての意見を伝えたい」と考えたわけだったが、少し技巧に走りすぎたのか、と考え直した。

教育という「営み」にとって、「これで十分とか、ここまでやれば大丈夫」という安心ラインは通常、存在しない。だから、「これでもか、これでもか」と畳みかけるように迫る。平成１７年度は「不審者から身を守る安全対策、学力低下を憂える問題」、平成１８年度は「いじめ問題」に関する内容が多い。要はあきらめずに続けることで、効果が出てくる。

「学校だより」は保護者を主たる対象としたが、教職員も大半が子どもの保護者であることを考えると、共通の土俵に載ったものとして（一読者として）受け止めてほしい、という願いも込めたつもりである。

今後とも、子どもたちの活動に目を配り、さまざまな角度から活動を伝え、学校の有り様を理解してもらう一助としていきたい。

３．始めはメモ代わりだった『私の伝えたいこと』

管理職としての仕事で、一番多いのが毎月の朝会に代表される「校長講話」や「行事での挨拶」である。

４年前の４月、新任校長として初めてその立場になり、そのことを痛感した。新任式、始業式、入学式・・と式の連続。式の中では必ず、「校長の話」というものがあった。

今、手元のノートを見ると「平成１４年４月８日、始業式での挨拶」として、いくつかの事項が箇条書きになっている。以後、さまざまな機会に話をしてきた。そのたびごとに、自分なりの体験や読んだ本を参考にしたり、教職経験で得た事柄を元に原稿を作ってきた。

翌年、管理職として２年目を迎え、朝礼や各種行事で「校長としてどうしても話しておきたいこと」を事前にメモの形で作成し、職員、行事に参加した方々（ＰＴＡ、地域の方々）に配ることにした。このようにしたのは、私自身が集会の前に心の準備ができることと、短時間で意が尽くせなかった場合、担任の先生を通して学級活動などで、もう一度話題にすることが出来るかもしれない、と考えたからである。子どもたちに「話したり、聞く力を高めよう」と、常々話している私自身にも、話の要点を要領よくまとめる自己研修を課したわけである。（**資料４**：「私の伝えたいこと」第１号　１学期の始業式で　平成１５年４月７日実施、　平成１８年度第７号　ＰＴＡ総会で　平成１８年５月２日実施）

平成１６年４月、板倉町へ異動し、現在まで続けており、年間平均４０回前後このような形のメモを作成している。メモを読み返してみると、その時の情景が思い浮かび、「あそこはもう少し詳しく話したほうが良かったかもしれない」とか、逆に「事例が少しくどかったかもしれない」など反省しきりである。

子どもたちにはこのメモは配布していないが、教職員を通して間接的に伝わっているはずであり、「話し上手は聞き上手」のたとえの通り、「良い話し手は相手の話を良く聞く」ことを学ばせ、発表名人を育てていきたいと考えている。

４．時流に流されず、教職員として確固たる自覚を持つ　　多忙な教職員に情報提供
「新聞紙面に見る『教育界』の動き」の作成と活用

時代はデジタル情報に溢れている。インターネットでホームページにあたれば、たち

どころに情報が手に入る環境にある。だが、われわれ教職員は毎日、子どもたちや保護者の対応に追われ、溢れているはずの情報がどんどん流れ去って行くことを止められないでいる。結局、気づいた時にはその情報が手元に残っていないことが多い。

高校時代、新聞研究部に在籍して「新聞作成」に２年余り携わったことのある私には、新聞というメディアの持つ「情報」の多様さは、昔も今も変わりがないと思っている。新聞は利用の仕方次第では、莫大な教育効果をもたらし、（既に**1**や**2**で記述済み）われわれの職務においても重要なパイロットとなる。

このような立場から、管理職として本校の職員には、常々「新聞記事（報道）には目を光らせ、教育界にどのような論調が向けられ、一般市民は「投書欄」などに教育界へどのような要望、意見をもっているのか注意しておくように」話している。だが、現実には新聞紙面の隅々まで注意するのは困難である。そこで、記事の切り抜きを行い、そこに簡単なコメントを書き加えて印刷し、配布することで教職員を支援している。

このようなことは、どこの学校の管理職も行っていることであろう。ただ、大切なことは「配布された印刷物に自分なりの意見を持ち、書き加え、時に応じて取り出して活用できるように手を加えておくこと」である。管理職として、私の仕事は、「記事の選択と保存性を考慮したレイアウト」である。

切り抜きの印刷方法については、以前はＢ４版の用紙を使用していたが現在はＡ４版に統一、保管の利便性を図っている。（**資料５**：「新聞紙面に見る『教育界』の動き」第１号　平成 17 年５月 23 日作成、皮肉にも管理職の「飲酒運転逮捕」の記事から開始。自戒の念を込めている。第 351 号　平成 18 年 10 月 16 日作成：ともに縮小印刷）

情報は「新しくて、生きのいい物が一番」という一面と、「じっくり腰を据えて考えてみる必要がある」という一面の両方があり、片方だけの物も多いが、両面を兼ね備える物もある。校内の教職員と情報を共有し、意見交換をすることで時流に流されず、確固たる信念を持った職員に成長していってほしい、と願っている。

最近は、「こんな記事があります」と切り抜きを持ってくる職員も出てきており、関心の広まりを感じる。新聞記事の活用は、熟達すれば「メディアの裏」を読み通す推理力につながり、子どもたちへの指導にも生かされるようになるはずである。

おわりに

時代は「ペーパーレス社会」に向かっているそうである。が、デジタルではなくアナログ的思考では、依然として「紙の印刷物を読んで理解し、行動を起こす」ことが主流である。今回、管理職として「情報を集め、分析し、目的にあった形に編成し、印刷して配布、考えを伝えていく」４つの実践例を示した。同様な実践を、もっと効果的にかつ手早く行っているケースがあると思う。ぜひお聞かせいただき、改善していきたい。

子どもたちにとっての「生きる力」とは、一体何か。それはさまざまな分野に及ぶと思われるが、今回は、「紙の印刷物を通して提供される情報を取捨選択して有効活用すること」である。「科学の窓」にしても、学校だより「伊奈良の子」にしても、こちらから子どもたちへの「情報提供・条件提示」にすぎない。自分たちに関係あることが掲載されているからそれでよいのではなく、そこから何を引き出し、何を自分の物にしていくか。問われるのはそこであり、それが実現できれば、「生きる力」が一歩前進したことになる。

私が、これら一連の活動を通して、児童・保護者・教職員に一番伝えたい（願っている）ことは、ひとえに「国語力の向上」である。「科学の窓」を読んだり、学校だよりを見てもその真意が理解、把握出来なければただの紙クズになってしまう。「読んで、自分なりの意見を持ち、思いを文字にして書き、言葉（音声）で伝える」、究極はそれにある。

教職員にとって「仕事のしやすい職場」にするための、子どもたちと「すごしやすい協

働の場」にするための「情報提供」を行い、さらに情報活用によって、もっともっと明るい・楽しい職場＝学校に変えていく。お互いの活動が見通せ、無理・無駄が省けるようになれば、管理職としてこれらの活動に関わっている意味合いが出てくる。そうでなければ、私の取組は、ただの「物好き」のあがきに留まってしまう。

最後に、今後の目標は、「情報量の減量」である。かさばらず、必要最低限の量にスリムに抑えていくこと。そして、独りよがりに陥らず、受け取り手の要望を聞き、双方向での情報発信に心がけ、ぜひともこの目標に近づきたい。